文 献 紹 介

日下雅義編著：

『古代の景観と考古学』

古今書院　1995年３月

Ａ５版　261ページ　2,678円

本書は，文部省科学研究費の重点領域研究「地球環境の変動と文明の盛衰―新たなる文明のパラダイムを求めて―」（代表者・伊東俊太郎氏）の一環として，日下雅義氏を中心とする諸氏が「日本海沿岸における地形環境の変遷と文明の盛衰」というテーマのもとで研究を進められた成果を，コンパクトにまとめられたものである。研究成果の一端は，平成５年11月に徳島市で開催された公開シンポジウムで披露され，本書はその成果を収録したものである。

本書には，以下に示す10本の論文が収められている。

第Ｉ部

森　浩一　古墳と環境
上田正昭　古代史と環境
石野博信　環境と住居
日下雅義　古代の環境と開発

第II部

中田正夫　最終氷期以降の海水準変動
前田保夫　最終氷期以降の海洋環境の変遷
竹村恵二　堆積物に認められる火山活動の歴史
高橋　学　臨海平野における地形環境の変貌と土地開発
外山秀一　稲作の波及と初期水田の立地
額田雅裕　荘園の立地と環境

第Ｉ部に収められた４本の論文は，いずれもその分野の第一人者が，長年の蓄積に基づいて，これから進むべき研究の方向を見通しつつ，滋味溢れる文章（言葉）で綴られている。その含蓄ある文章はもとより，行間から学ぶべき点も実に多い。日下氏の論文のはじめに記された「わが国の場合は，・・・弥生時代と呼ばれるこの時代にはさまざまな変革が生まれましたが，低地を中心とした稲の栽培があげられます。面的な環境破壊が進むようになったのです。」の一文は，土地の開発を是として研究してきた一人として，心に深く刻み込んでおかねばなるまい。

第II部に収められた６本の論文は，気鋭の研究者が研究の最先端をコンパクトにまとめられたものである。その内，高橋・外山・額田の三氏はいずれも日下氏の薫陶を受けられた方々であり，すでに古代の歴史地理学にそれぞれ新しい息吹を吹き込まれつつある。

まず，高橋氏は，瀬戸内海沿岸の臨海平野における200カ所の発掘調査に基づく地形環境分析の結果，縄文海進最盛期以降に11のステージを策定し，それぞれのステージの特徴を述べると共に，瀬戸内周辺の臨海平野を３つのタイプに分類される。11世紀頃の完新世段丘II面の形成をはじめとして，従来の1000年のオーダーではなく，100年のオーダーで臨海平野形成の編年を明らかにされ，その成果の一端はすでに歴史学においても取り入れられつつある。ただし，土地開発のなかで，水田耕作にかける比重がやや大きすぎるのではあるまいか。

次に，外山氏は，日本における稲作普及の実態について，稲作農耕を構成する文化要素を３つの資料群に分類し，各要素を時間的・空間的に検討されている。５枚の図に集約されたその成果は，ややラフに過ぎた従来の稲作東進のイメージを刷新するものである。さらに関連資料の蓄積をされて細部の詰めをされるとともに，稲作開始の鍵を握る島における陸稲栽培の実態解明を切望したい。

さらに，額田氏は，遺跡の立地環境を考察する場合，現在の地形図上に遺跡の分布を示して地理的環境を記述する研究が多いことを批判され，歴史時代における環境変化に検討を加えている。和歌山平野に立地した木本荘をはじめとする５つの荘園の故地の詳細な地形分類図を作成し，立荘時の地形環境を復原すると共に，その後の変化とその影響を明らかにされている。

本書を一読して，地形環境は不変ではないという厳然たる事実と，古代の歴史地理学を研究する場合の環境復原の重要性を再認識すると共に，日下氏が巻末のあとがきに記された「特定の学問分野に安住している時代はもはや終わった。」との一文は，改めて心に留置くべき一文であろう。

（伊藤寿和）